



読者からの声

石川医報の「読者からの声」は、会員がいろいろな意見を交換する場です。
ぜひ、皆様からのご意見、ご投稿をお待ちしております。
(編集部より)

女性医師の窓

医師として、母として、人として

城本クリニック 形成外科 吉田 絵理

思いがけないところから、こちらの原稿の執筆のご依頼をいただきました。

現在私は医師6年目、5歳・2歳のやんちゃ盛りの子どもが二人おります。そしてまた、まだまだ医師としては駆け出しの7年目の夫(耳鼻咽喉科)と、家族4人で生活しております。そして双方の実家は県外一つまり共働き核家族という、とくに北陸ではかなり少数派の境遇の女性医師であると思います。

私にいったい何が書けるでしょうか？ 今春に行われた大学の同窓会では、当直なし、6時上がりの(医師としては)時短である私の勤務スタイルを、今が一番脂の乗りはじめるタイミングの同期のなかには、“医師のはしくれ”と称する人もいたかもわかりません。

ではいっそ、少数派だからこそ感じている日々の思いを書いてみようと思います。

医師の中でも、男性・女性問わず学生時代の志望科と実際のライフワークが異なることはあると思います。私自身も本来、大学入学以前より志望していた診療科は小児科でした。私自身が若いころから何より小さい子どもが大好きで、大人になったら子どもたちのために働きたいと常に考えておりました。

その子ども好きが興じて、大学卒業時に念願かなっての“母”になれたわけです。

しかし、当然のことながら、育休明けの小児科研修のなかで、自分自身の中に大きな葛藤が生まれました。子育てと仕事の両立は、頭で思い描いていた以上に物理的にも精神的にもたくさんの重圧となり、人生で初めてとっていいくらい大きな挫折を経験しました。

しかしそんな初期研修時代にもたくさんの恩師に出会い、導かれるように形成外科を専攻することに決めました。

そんな中、長男がまだ赤ちゃん時代にある先輩医師に言われた一言で今でも心に残っている言葉があります。「赤ちゃん時代はおなかが満たされて抱っこさえしてもらっていたら誰でもなつくけど、大きくなればなるほどその子の心もその子を取りまく社会も難しくなる。そんな時に父親・母親の子どもに対する役割・姿勢は本当に重要だよ。」と。

「子どもって、小さいうちが風邪ばかりひくし出勤前も帰宅後も世話に寝かしつけにと手がかかるし今が一番大変！」…と思っていた当時の私には今一つぴんときてなかったのですが、今長男が5歳になり、少しずつその意味を痛感しております。

子育ては後戻りできない。そして、自分の子どもを本当に守るべきは、まぎれもなく親です。

土日祝も仕事やら県外セミナーやらで家にいないことが多々ある私にかわって、夫は家事や育児に協力的です。母であり父のような私と、授乳以外はなんでもこなす父であり母のような存在の夫。夫婦2人二人三脚でなんとか仕事に育児に奮闘しております。

また縁あって今は美容医療に携わっておりますが、豊かな国日本では確実に cosmetic surgery/cosmetic dermatology の需要はのびており、精神的に豊かでありインナービューティを目指すことは、公衆衛生にも大いに貢献するのではと考えております。

首都圏では熱心に研究会や学会が開催されておりますが、今後はもう少し北陸でも認知され、活性化することを願ってやまないです。

最後に、このような境遇の中でも医師として、母として、人間として少しずつですが確実に経験を積んでいるのは、恵まれた職場と、子育てを通じて出会えた新たな社会、幾人かの恩師、そして何より一番にそばで支えあっている夫のおかげと日々感謝しております。

